

『キュリー夫人の玉手箱 科学は素敵がいっぱい』

吉祥瑞枝著／東京書籍

この本を読んだきっかけは著者である吉祥瑞枝先生に頂いたからです。吉祥先生とは電気化学会の男女共同参画推進委員会主催の交流昼食会を通じて知り合いました。長年、キュリー夫人について研究されており、サイエンス スタジオ・マリーを主宰されています。サイエンス スタジオ・マリーは、アートとサイエンスの融合を掲げて、お子さんや若い女性、お母さん方に科学・技術に気軽に親しみ、楽しんでもらおうと2002年に結成され、日本伝統の“紙芝居”の手法をベースに絵、音楽、映像を加えて“実験ショー”という構成で関東圏を中心に地方でも公演を重ねられています。

本の主人公であるキュリー夫人は、“ラジウムウーマン (The Radium Woman)”と呼ばれ、放射能という言葉の名付け親です。女性で初めてノーベル賞を、しかも2回受賞しました。1903年にノーベル物理学賞を、アンリ・ベクレル、および夫ピエール・キュリーと共に「放射能の研究」で受賞。1911年には2度目のノーベル賞として、ノーベル化学賞を「ラジウムおよびポロニウムの発見とラジウムの性質およびその化合物の研究」で受賞しています。キュリー夫人の教育者としての成果が、研究仲間と行っていた“キュリー夫人の理科教室”です。娘イレーヌを含む10人くらいの子供たちに自主的な共同授業を行いました。後年、この授業を受けた子供たちの中からは、ノーベル賞受賞者(娘イレーヌ)や女性初の化学技術者(イザベル・シャヴァンヌ)が出ています。

キュリー夫人は、世界の科学者の中でも、最も有名な女性科学者であり、知名度は高いですが、実際の姿や業績について知る機会は少ないかもしれません。この本の中には、キュリー夫人の言葉がたくさん詰まっており、キュリー夫人をより身近に感じることができるようになっていきます。また、夫ピエール・キュリー、娘イレーヌの言葉やキュリー夫人へ送られたアインシュタインや新渡戸稲造などの著名人の言葉も掲載されていて、キュリー夫人の素顔を垣間見ることができる一冊です。ポーランドのワルシャワに生まれ、勉強するためにパリに出て、長年過ごしたパリの街には、キュリー夫人ゆかりの場所が多く残っています。パリを訪れる楽しみの一つになればと思います紹介させて頂きました。

執筆者紹介

白仁田沙代子

物質材料工学専攻助教。専門領域は、電気化学、触媒化学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『キュリー夫人の玉手箱：科学は素敵がいっぱい』 吉祥瑞枝著 東京書籍 2012年
品切

[ブックガイド目次へ](#)